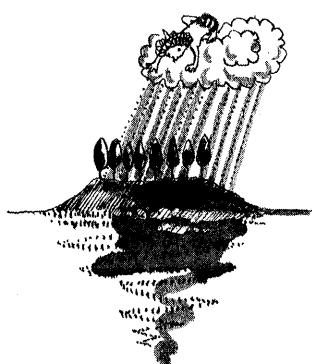


## 特集 ～暗い～

### 星明かり、雪明かり

林 完次



#### 静寂な夜の音

毎月のことながら、月のない時期になると外に目をやつてはそわそわ。

観天望氣である。テレビの天氣予報で気圧配置が西高東低の冬型になつたのを確かめると、そそくさと撮影器材を車に積み込み八ヶ岳方面へ向かう。

まだ陽のあるうちに目的地に到着し、ロケハン場所を選定する。ポットに用意した熱いコーヒーをすりながら、茜色に染まつた西の空の微妙な色の変化を楽しみながら星の出を待つ。もつともお気に入りで、心落ちつく時だ。

山間の里は日の暮れが早い。が、星の出も早い。

## 特集 < 暗い >

西の空に赤味が残つているうちに、すなわち漆黒になる前の群青の空に星が瞬きはじめる。大気の透度が高く、灯火が少ないだろう。星はまだ遠く小さいが、そうなるとんびりしていられず活動を開始する。あらかじめセットしたカメラのアングルをきめ、シャッターを切る。ひとコマの露出時間は、ときに一時間以上のときもあるが、晴れているときは夜明けまで何回となく同じことを繰り返す。

人づ子一人居ない山ふところの真っ暗闇——。あるのは自分と満天の星だけ。よくもまあ、好き好んでそんなところへ行くね。などと軽口をたたく友人もいるが、いやいや、そうではないのだ。耳を澄ますと、いろいろな仲間がいることがわかる。野兎の来訪、犬の遠吠え、チチと鳴く鳥（それとも虫？）ほとんど一年中お目に、いや、お耳にかかるといふが眞面目に正体をつきとめようとしないので、いまだに何であるのかわからない）。ときには、けたたましく大地を駆け回る猪の蹄の音も。

さらには風でさわざわ音をたてる樹林もあるが、音の極め付きは地球の回転音だ。夢中でカメラのシャッターを切つていると時の経つのも忘れがちだが、星の動きがそれを教えてくれる。星の日周運動は地球の時点によるものなので、星の動きを見ていれば、地球が回転する音が聞こえるような気がしてならない。

### 昼間の星見

星の光はあまりにかぼそいため、洪水のように光あふれる都会ではほとんど見ることができない。

ところが大気の澄んだところなら、昼間でも星が見えるのを存知だろうか。金星である。夕方西の空に見えるときを宵の明星、明け方東の空に見えるときを明けの明星というので、さしづめこれは「真昼の明星」と名づけたい。

見つけ方はいたって簡単。あらかじめ天文年鑑などで金星が太陽からどの方角に何度離れているかを

## 特集 < 暗い >

調べておく。あとは青空を仰ぎ太陽を日安にそのあたりを注意深くさがす。これだけで銳眼の人なら二、三分で見つけられる。太陽の光がまぶしいときは紙を丸め、望遠鏡のよろにしてさがすのもよい。

そうそう紙筒といえば、お風呂屋さんの長い煙突を使うという似たような方法もある。煤だらけの真つ暗な長い煙突——これはもう巨大な望遠鏡だ。

ひょっとすると、昼間でも金星以外の星が見えるかも。

だが状況はそれほど甘くない。勝手に心を躍らせても、近ごろはお風呂屋さんもめつきり少なくなつたし、こんな不眞面目な目的のために煙突を使わせてくれるわけもない。が、もし使ってもいいという太っ腹のお風呂屋さんがいたら、ぜひともご一報を。ワイワイやりながら、昼間のスター・ウォッチングを楽しもうではありますか。

さて星の等級は、一等星は六等星の百倍明るいといふことが基準となつてゐる。光度が一等級違え

ば、明るさは計算から約二・五倍違うことになる。すなわち二等星は一等星より二・五倍暗く、三等星より二・五倍明るいことになる。

金星の光度は平均でおよそマイナス四等。ということは一等星のちょうど百倍明るいわけで、昼間見えるのも納得がいく。

ところで金星の光輝がどれほど鋭いか、経験したことがある。いつものように山間で星の撮影をしていたときのこと、夜明け近くに金星が東の空に姿を現した。その輝きは、まさに明けの明星にふさわしい。ギリシャ語で“焼きこがすもの”というセイリオスから名づけられた大犬座のシリウスより、光の強さは格段に違う。暗闇に慣れた目にはまぶしいとさえ感じる。

気がつくと、金星の光で微かながら影ができるいるではないか。まさか——近くの灯火による影ではないか、あたりを見渡すがそれらしきものはない。紛れもなく金星の影だ。太陽は日影、月は月影、と

## 特集 < 暗い >

### インテリアデザインと「暗い」

長山 洋子

インテリアデザインとは、そこに住まう人々にとって快適な環境を創りだすことです。人間の五感にかかる全てがそのデザインの対象になり、機能や使い勝手だけでなく、美しいものは何かを自由な

発想で追求することだといえます。「暗い」ともインテリアをデザインするための重要な要素になっています。そこで、暗さを生かすとは、どのようなデザインなのか考えてみることにします。暗さを生

なれば金星は金影だ。一等星百個分の光量はだてではない。

その金影も数日後の降雪で姿を消した。雪明かり

に、明けの明星もちょっぴり照れたのだろう。輝きはいつもよりソフトに見えた。

(写真家)

